銀の皿

「文字に生きる」

先日、門司港レトロで開催されている書道展へ行って参りました。これは余談な話ですが、受付の方が「名前を記入してください」と言われた時、私はドキッとしました。受付の方が書家の方とは限らないのに、私の名前の書き方、後でチェックされたらどうしようと考えてしまったからです。会場の静けさと相まって、筆を持つ手が震えながら自分の名前を書きました。しかし私は皆様の作品を見て非常に心揺さぶられ、時には涙が出そうになりました。何故なら展示された方が文字に真剣に取り組まれたことが分かったからです。

私は書道の知識に関して精通しているわけではありません。どこをポイントとして見て良いかもわかりませんし、出品者が書いた古文や漢文にしても、その年代や言葉の意味もわからなかったりします。しかしたった一つはっきり分かったことは、毎日の積み重ねを通じて、書家の方達はこの作品に至ったという事です。日々の中で心に響いた大切な言葉、感銘を受けた先人の言葉、書き現わしたいと思った、その言葉を描くために、筆を取り、半紙に何度も何度も書いて、書いて書き続けて現在の姿がある。いつかも似た様な事を書かせていただきましたが、作品を通じて、その場所にはいない作者に出会うという体験をしました。私は正直, 自分の体裁を考えて恥をかきたくないと思った数分前の自分を恥じて、内面から自分の大切にしている事がにじみ出るような牧師でありたいと思いました。

聖書の文字をなぞって生きようと願って歩く時に、その通りに歩めない自分に出会います。そういった自分を知る時に、私達は人生の中でこれ以上の醜態を人々にさらしたくないと思い、これ以上傷つきたくないと思い、これ以上孤独に陥りたくないと思います。でも今日私達が学んだことは「私の愛の中にとどまりなさい」というキリストの言葉に従う事です。私達はキリストの尊い犠牲によって赦されています。罪なき方が私以上に傷つき、責めと恥を背負われました。十字架で流された血潮は私達の罪のためです。その事を知る時に、私達の自我は砕かれ、本当の愛を知ります。つまるところ、自我の為に愛せない私達が人々を愛する者と変えられるために、どれだけ赦されているか学ぶことだと聖書は語っています。そのような体験を積み重ねた人の言葉は暖かく重みのあるものになっていくに違いありません。永遠に変わることが無い神の愛にとどまり続ける者となりましょう。

ヨハネによる福音書 15:5
「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。」